

重層化する悲劇 —— 木下順二「夕鶴」論 ——

山口 仁 見

一、作品の概要

「夕鶴」は一九四九年一月『婦人公論』に発表された、木下順二の戯曲作品の内の一つである。この作品は、一九四二年七月に発行された『全国昔話記録』内の「佐渡島昔話集」に収録されている「鶴女房」を原話として書かれた戯曲「鶴女房」⁽¹⁾を、さらに改稿した上で発表されたものである。

発表された同年の一〇月に「夕鶴」は、ぶどうの会によって舞台化された。初演を迎えると当時の人々から称賛され、一九五〇年二月に、一九四九年度毎日演劇賞の脚本賞を木下順二は受賞した。また山本安英が演じるつうは絶賛され、菅井幸雄が「この作品は、民話を題材とする現代劇であるが、そのすぐれたドラマツルギーと、つうに扮した山本安英のたぐい稀な演技によって、民話劇という一つのジャンルを、戦後の演劇界のなかに定着させる契機になった」と論じているように、山本安英が亡くなるまでの上演回数は千回を超え、戦後、人々に広く愛された舞台作品の一つとして、その名を連ねている。⁽⁵⁾

その一方で、ほぼ同時期の一九五二年の高等学校の国語教科書に、

「夕鶴」は採択されていた。その後、採択する教科書会社や掲載する学年の幅は広がり、最終的には小学校から高等学校まで幅広く扱われるようになり、一時は定番教材とも呼ばれるようになっていった。近年では戯曲「夕鶴」を教科書教材として扱うことは、皆無の状態となっていたが、二〇一一年度に教育出版が『ひろがる言葉 小学国語4下』で、物語形式に書き直された「夕鶴」を再び採択している。⁽⁷⁾

「夕鶴」のあらすじは次の通りである。

与ひように救われた鶴のつうは、報恩のために彼の元に嫁に来て機織りをし、その機織りをしているところを覗かないという約束を交わす。しかし与ひようが約束を破り、惣ど・運ずと共に機を織っているところを覗き見たため、つうは二枚の千羽織を与ひように渡し、飛び去っていく。

このあらすじから推察できるように「夕鶴」は、全国各地で「鶴女房」や「鶴の恩返し」と称され語られている話型のバリエーションの一つとして、捉えることができる。しかし、元来の「鶴女房」や「鶴の恩返し」などの民話と同一視してしまうには、見過ごすことができない独自の展開が、「夕鶴」には存在している。「夕鶴」独自の展開について、小沢幸代は「夕鶴」発表以前に発行された民話

と「夕鶴」を比較しながら、その相違点を五つに整理して次のように述べている。

第一点。鶴が人間の所へ来る理由。

「旧民話」…助けてくれた人の恩返しとして。

「夕鶴」…助けてくれた人のやさしい心を慕って。

第二点。鶴が機織りをする理由。

「旧民話」…布を売って暮らしを楽にするため。

「夕鶴」…美しい布を見て喜んでくれるのがうれしくて。

第三点。欲を出すようにしむけたり機を織っているところをのぞかせようとそそのかす人物の有無。

「旧民話」…出てこない。

「夕鶴」…出てくる。

第四点。機織り場ののぞき見する理由。

「旧民話」…糸も無しに織れるのが不思議だとか見るなどい

われると余計見なくなつてという好奇心から。

「夕鶴」…へ中にいるのは鶴だと言われて心配になつて。

第五点。鶴が去った後の残された人間の行為。

「旧民話」…鶴の織った布を売って幸福に暮らす。

「夕鶴」…与ひようは嘆き、つうが最後に織った布を他人

に渡そうとしない。

小沢が述べているように、以上五点が民話を基準とした際の「夕鶴」独自の展開であり、「夕鶴」を他の民話から差異化させている重

要な事柄でもある。小沢は触れていないが、「夕鶴」は男が鶴を助ける場面から始まるのではなく、民話という物語の中盤から始まり、つうの正体が鶴で恩返しのためにやってきたという事実が後から明らかになれるという構造の違いも持っている。木下順二が「鶴女房」という民話を単なる素材と考えて一篇の現代劇を書いた⁽⁹⁾と述べているように、作品内の出来事が時系列通りに展開していくのではなく、順番が組み替えられてだんだんと明らかにされていく構造が、「夕鶴」の読みにも大きな影響を及ぼしていると考えられる。

このように「夕鶴」は、話の大筋においては、民話である「鶴女房」や「鶴の恩返し」と同じ話型に分類されるが、細かい部分にまで目を向けてみると、民話と同じだと一概に言ってしまうことができない部分を多く含んでいる。

二、先行研究の変遷と問題の所在

「夕鶴」の先行研究を整理すると、「夕鶴」というタイトルから予測できるように、物語の核である、鶴の化身のつうを中心に論じているものが主流となっている。

主な内容は以下の四つに分類できる。第一に、菅井幸雄⁽¹⁰⁾や尾崎宏次⁽¹¹⁾のように、上演された「夕鶴」と比較しながら論じているもの。第二に、鈴木敏子⁽¹²⁾や井上理恵⁽¹³⁾のように、原話である「鶴女房」との違いから、「夕鶴」の特徴を探り論じているもの。第三に、稲葉三千男⁽¹⁴⁾や十河愛子⁽¹⁵⁾のように、つうの言動について言及しているもの。最後に、平井修成⁽¹⁶⁾や石塚倫子⁽¹⁷⁾のように他作品と比較しながら、「夕鶴」

の特徴を論じているもの。また、以上のような論に加え、近年では千田洋幸⁽¹⁸⁾のように、つうを相対化して論じているものもある。

最終的に「夕鶴」の主題について言及している論としては、西村恵が『夕鶴』は忍従と犠牲に生き、またその中に死んでいった日本の女の典型的な美しさとかなしさを描いた作品である⁽¹⁹⁾と指摘しているように、理想の日本と「夕鶴」の世界を重ね合わせたものが、早くから成立している。また、「夕鶴」が発表されたのが終戦直後であることや、作者である木下自身の「つうにおけることばの断絶という問題は、たぶんあの戦争中の体験と無関係ではなかったはずだ⁽²¹⁾」という「夕鶴」に対する解釈が反映し、木下自身の戦争体験に重ね合わせて論じているものがあげられる。もしくは、井上が『夕鶴』をこの戯曲が生まれた戦争状況の中に置いてみるなら、国民一人一人の自己犠牲の上になりたっていた戦争を否定する象徴的戯曲と読むことも可能であるにちがいない⁽²³⁾と論じているように、反戦的テキスト⁽²⁴⁾として捉えるものに分けられる。

このように先行研究を整理してみると、舞台として上演された「夕鶴」の高評価が文学作品としての「夕鶴」の評価にも反映されているため、木下の「夕鶴」に対する解釈や、作品内のつうの言葉を批判的に捉えることがなく、そのまま受容してしまっていることが、問題点としてあげることができる。登場人物についてもつうを中心に、善か悪かの二項対立で論じているものが定型となっているのも、前述したような作品内の言葉を無批判に受容してきたことが影響していると考えられる。つうを相対的に捉えるのであれば、与ひょうや惣ど・運ずの関係性への言及や、それぞれの登場人物が作品内、

どのように機能しているかについての考察を、さらに重ねていくことが、必要不可欠であるといえるだろう。

以上の点を踏まえ、本論では与ひょうや惣ど・運ずの関係性から「夕鶴」を読み直し、作品の構造を再考していきたい。また、本論では文字媒体に限定された場合の「夕鶴」の構造を探っていくため、上演された「夕鶴」に関する評価は、さしあたり捨象して論考を進めて行くことにする。

三、与ひょうの変化

与ひょうについて先行研究では、鳥居明雄が原話の「鶴女房」と比較しながら「与ひょう像にうかがえる白痴と無自覚は、この戯曲の要諦であって、原話と画する面目になっている⁽²⁷⁾」と論じているように、つうが鶴だと気がつかない人物として描かれているところが、与ひょうと「鶴女房」の男との大きな違いである。一方で十河愛子は、惣ど・運ずとつうを対比しながら、次のように述べている。

「千羽織」の価値に目をつけた「うんず」や「そうど」は、「つう」とは対照的世界に住む人たちである。「つう」を理想の世界、愛の世界とすれば、彼等は現実の世界に住む俗人であり、「与ひょう」はこの二つの世界で揺れうごく弱い人間であろう。「与ひょう」は、「そうど」や「うんず」にそそのかされ、次第に「現実の世界」「金の世界」へひきずられていく。いや、いい方をかえていうならば、頭の弱い、正直一途の「与ひょう」が、「金」

という現実に眼ざめたというべきかも知れない。

十河が指摘しているように、与ひようは惣ど・運ず²⁹にそそのかさ
れたためにだんだんと欲を持つようになり、つうと対立する世界の
住人へと変って行ってしまったと捉えられることが多い。だが、与
ひようがそれまでの彼ではなくなっていたきっかけを作っていた
のは、つう自身であるのだ。このことは、次に引用する「夕鶴」の
冒頭での惣ど・運ずの会話で明らかになっている。

惣ど あれか？あの女が与ひようの女房か？

運ず そうだ。与ひようの奴、急にええ女房を貰うて仕合せな

奴だ。近ごろはろばたで寝てばかりおるわ。

惣ど ばかはばかなり、昔は大した働きもんだったがのう。

どうしてあげなばかのところへ、あげなええ女房が来たも
んだ。

運ず いつどこからともなく来よつたが……お蔭で与ひようは
懐手で大金儲けだ。

この二人の会話から、つうがやってきたことによって、「働き者」
であった与ひようが「近ごろではろばたで寝てばかりいる」怠け者
になってしまったという、つうが来る前の与ひようの様子を知るこ
とができる。このように、つうが来て千羽織を与ひように与えたこ
とによって、彼がお金の価値に気づくようになっていったことが示
唆されている。

与ひようが変化していくことが、物語全体にどのような効果を与
えているのかを考察するにあたって、原作である「鶴女房」³⁰での機
織りが、どのように描かれていたのか確認していきたい。

二、三日もたつと、嫁は「六尺四面の機場を拵えてくれ」と
たのんだ。兄ちゃんは「金もないに、どうしたらええ」思つて
居ると、嫁さんは「俺がええようにするから拵えてくれ」と云
うので、六尺四面の機場を作つてやつた。すると嫁さんは「俺
の機を織つてる処を見てくれんな」と云つて、其中に入つて、
一機織つて出来上ると、出して見せた。それが錦だやら何だや
ら知らんが、そこらで着るもんでもなかつた。嫁は「それを天
朝さまの処へ持つて行って、千円に買うてくれと云え」と教え
た。兄ちゃんが其布を持つて行って、教えられた通りに云うと、
天朝さまは千円くれた。

このように「鶴女房」では、嫁である鶴が男に対して、自分から
織つた布を天朝さまに売るよう提案している。このことから、「鶴女
房」では、機織りをするという行為だけでなく、布を千円に換金す
ることまでが、恩返しの一環となっていることが読み取れる。
これに対して「夕鶴」での機織りは、つうの独白によって次のよ
うな行為として意味付けられている。

つう これなんだわ。みんなこれのためなんだわ。……おかね
……おかね……あたしはただ美しい布を見てもらいたくて

……それを見て喜んでくれるのが嬉しくて……ただそれだけのために身を細らせて織ってあげたのに……もう今は……ほかにあなたをひきとめる手だてはなくなってしまうた。(中略)そうさしてあげさえすればあなたが離れて行かないのなら……もう一度、もう一度だけあの布を織ってあげるわ。それで、ゆるしてね。だって、もうそれを越したらあたしは死んでしまうかもしれないもの。

引用したつうの言葉から読み取れるのは、つうは自分の織った千羽織自体に価値を見出しており、「鶴女房」で見られたような、布に金銭的価値が発生することを想定した上で機織りをした訳ではないということだ。最初は美しい布を見せることまでが、恩返しの手段だったのである。その後、与ひょうの手によって、千羽織が金銭に替えられるようになったことを、つうは仕方がないことだと受け入れつつも、金がどのような存在なのか、根本的に理解できていないため、与ひょうの変化を拒絶しているのだ。

このことについて、稲葉三千男が「相手をひきとめるただ一つのメデイウムが、じつは相手をひき離すミッテルとして機能する。」⁽³¹⁾と指摘しているように、与ひょうを喜ばせるために、つうが行った機織りという行為が、与ひょうにお金の価値を教えてしまい、逆に二人を引き裂く要因になってしまっている。その結果「夕鶴」において千羽織は、原話にあった恩返しの手段という意味合いだけにとどまらず、二人を引き裂くための要因として逆説的に機能するようになってきているのだ。

それだけではなく、先に引用したつうの独白からも分かるように、つうは美しい布を見て喜んでもらうという当初の目的から離れ、与ひょうを引き止めるために、自分の身を犠牲にして命を削りながら、布を織ろうとしていることを告白している。ここで、千羽織は平和に暮らしていた二人を引き裂いた象徴であるとともに、つうの与ひょうに対する愛の象徴という、二つの意味を付随させることになる。つうがお金を、千羽織と交換できる価値を持ったものと見いだせないために、お金はつうの言葉によって、彼女に対立するものとして物語内に浮上してくる。千羽織を金銭に替えることは、つうの愛を金に替えることと同義になるため、否定的な印象を持たされていくのだ。

つうが千羽織を金銭に交換することを望んでいないにも関わらず、与ひょうが千羽織をお金にしていくことは、つうの愛を蔑ろにし、お金を求めるようになってしまったと受け止められるため、与ひょうの変化は受け入れがたいものとされていったのだ。

このように、与ひょうの変化は、つうに根本的な原因があるといえる。では、なぜ与ひょうはつうを悲しませてまで、お金を求めるようになったのだろうか。その理由を探るために、惣ど・運ずと与ひょうの会話を引用したい。

惣ど な、分ったな？どうでも織らんちゅうたら、出て行ってしまっぞちゅうておどかしてやるだぞ。

与ひょう えへへ。あの布、美しい布だろうか？つうが織ったんだ。

惣ど だてよ、美しい布だけに、今度は前の二枚も三枚分もの金で売ってやるだ。分かったな？前の二枚分も三枚分もの金で売ってやるだぞ。そういうて女房に話してみろ。

与ひよう うん。前の二枚分も三枚分もの金で売ってやるだな？

惣ど そうよ。何百両だ。

与ひよう な、何百両だな？

惣ど そうよ。だですぐ織らせるだ。のう運ず。

運ず そ、そうだ。今晚すぐと織らせるだ。

与ひよう うふん。んでも、つうはもう織らんちゅうたて。

惣ど ほか。高いこと売つてうんと儲けりや、女房も喜ぶに

きまつとるが。

運ず そ、そうだ。女房も喜ぶにきまつとるだ。

与ひよう うん……

惣ど その上におめえ、都見物までさしてやるだぞ。のう運ず、

都は立派なもんだのう？

運ず うん、そうだ。立派なもんだ。

与ひよう 都は立派なもんだらうのう。

惣ど そうともよ。ええか？大金儲けをした上に都見物だぞ。

都では今いうたように仰山面白いもんを見せてやるで。う

ん？それとも都へなんぞ行きようはないか？

与ひよう そらア、そらア行きたいでよ、おら。

運ず 金もほしかろが？

与ひよう うん、金もほしいでよ。

惣ど (家の中のつうに気づいて) さ、はいれ。ええな、今すぐと織らせるだぞ。織らんちゅうたら、出て行ってしまうちゅうだぞ。

与ひよう ーうん……

最初は布を織らせることを躊躇していた与ひようであるが、惣どの「女房も喜ぶにきまつ」ているという発言を受けてからは、布を織らせるように交渉する方へと心が傾いていく。ここでの会話から、与ひようが金を求めるように変化していったのは、お金を儲けることがつうを喜ばせることだという考えを持っていたからだと言え取ることが出来る。

このように、与ひようはつうを思う故に行動する。しかし、そのことをつうが理解できずに彼の変化を拒絶する。以上のようなプロセスが描かれることで、与ひようがつうよりも金を求めるようになり、金に心を奪われるようになったと読者に理解されるようになっていたのだ。このような拒絶反応をつうが取ることによって、与ひようの行動の根底に存在していたはずの、つうを大切に思う気持ちというものは、つうの言動によって表面化してこなくなる。幸せに暮らしていたはずのつうと与ひようが、だんだんとすれ違っていく様子が描かれることによって、原話よりも別れの悲劇性が高められていく。「夕鶴」における悲劇は、つうの悲劇だけでなく、つうを思っていたはずの行動が裏目に出て、最終的にはつうを失ってしまう、与ひようの悲劇も描きだしているのだ。

四、惣ど・運ずの役割

「夕鶴」において惣ど・運ずは、つうに「別の世界の人」と言われていることが影響し、先行研究でもつうに対立する人物として受け止められていることが多い。だが、鳥居明雄が「原話において鶴に対置された一人の男を、与ひようと惣ど運ずの二系統に分裂させた」と指摘しているように、原話の「鶴女房」での男の行動を考慮すると、惣ど・運ずのように金儲けの欲求を持ち、主体的に行動する人物は、物語を進行させていく上で必要不可欠な存在である。

以上のことから、先行研究で述べられているような、つうと対立し彼女の言動の正当性を高める存在という役割以外に、惣ど・運ずが物語に何らかの効果を与えているのは確実である。惣ど・運ずの役割を再考していく上で、次に引用する二人の会話の内容に着目したい。

惣ど (鶴の羽を見ている) のう……鶴や蛇がのう、ほれ人間の女房になるつちゅう話があるのう。

運ず な、何だと？

惣ど ううん……そういえば、昨日村の仁じがいうとつた……

四、五日前の夕方に、あの山の池のところを通りよつたら、女が一人水際に立っとなつたげな。……何やら風がおかしいと思つてそおつと見るとよ、すうつと水の中にはいつたところを見るとおめえ、鶴になつとなつたげな……

運ず ええっ？

惣ど そうして暫く水の中で遊んでから、またもとの女になつて、すうつと戻つて行つたちゅうが……

運ず ふわあ……(外へ逃げ出す)

惣ど お、おい、何だ、妙な声出して……(思わず自分も外へ出る)

運ず お、おい、ならあの女房が、つ、鶴……

惣ど ばかが、そげなこと分るもんけ。いや、そげなばかな話
が……

つうとの会話が成り立たなかった事実と村人の噂話を結び付け、つうが鶴ではないかという疑問を持った二人は、その後の与ひよとの会話で「はあ？ 鶴か？ うん、鶴なら、いつだったかおらが鳥打つたら、くろに鶴が下りて来てよ、矢を負うて苦しんどつたけに、抜いてやったことがあるわ」という、つうが鶴であることを決定付ける発言を、与ひよから引き出させる。このように、惣ど・運ずは、つうが鶴であることを物語の序盤で提示することで、原話「鶴女房」には見られなかった、新たな展開を「夕鶴」に与えている。従来の民話や「鶴女房」であれば、嫁の正体が鶴だと明示されるのは、末尾の覗き見のときである。「夕鶴」では、つうの独白の影響もあり、物語の途中でつうが鶴であることが露わにされてしまう。このことによつて、惣ど・運ずがつうを鶴と分かつた上で、金儲けの道具として利用しようとする俗的な側面が強化され、つうと惣ど・運ずの対立は、物語内で強化されるようになる。

前述した金儲けのことだけでなく、つうと惣ど・運ずとの関係の

描かれ方も、両者の対立を明確化している。次に引用するのは、つうと惣ど・運ずの最初の出会いの場面である。

運ず わっ。

惣ど あっ。こ、こら、留守の間に上がりこんで……

つう ……? (鳥のように首をかしげていぶかしげに二人を

見まもる)

運ず へい、おらはその、向うの村の運ずつちゅうもんで、あ

の布のことではいつもどうも与ひょうどんに……

つう ……?

惣ど そんな、なあかみさんよ、実はその、布の話をこやつか

ら聞いて……おらも向うの村の惣どつちゅうもんだが、

ちよつと話があつて来たもんだ。……全体それは、こういっ

ちや何だが、ほんなもんの千羽織かね?

つう ……(ただいぶかしげに見ているが、ふと物音でも聞い

たように、身をひるがえして奥に消える)

このように惣ど・運ずは、つうにとつて最初から言葉の通じない存在として描かれている。つうの言葉で言うならば、「別な世界の人」として、惣ど・運ずは最初から拒絶されている。松坂俊夫が「俗塵の世界の運ず、惣ど」⁽³³⁾と論じているように、二人がつうを金儲けの道具として利用しようと考えていることから、つうが彼らを拒絶することは、当然の反応として受け止められるようになっていく。

このように言葉の断絶は、つうにとつて分かりあえない存在との

間に起こるはずであったのが、物語の途中で同じ世界の住人であったはずの、与ひょうとの間にも引き起こされる。

与ひょう 布を織れ。すぐ織れ。今度は前の二枚分も三枚分も

の金で売ってやるちゅうだ。何百両だでしょう。

つう (突然非常な驚愕と狼狽) え? え? 何ていったの? 今。

「布を織れすぐ織れ」―それから何ていったの?

与ひょう 何百両でしょう。前の二枚分も三枚分も金で売って

やるちゅうですよ。

つう ……? (鳥のように首をかしげていぶかしげに与ひょう

を見まもる)

与ひょう あのなら、今度はなあ、前の二枚分も三枚分も金

で―

つう (叫ぶ) 分からない。あんだのいうことがなんにも分

らない。さっきの人たちとおなじだわ。口の動くのが見

えるだけ。声が聞こえるだけ。だけど何をいつてるんだか

……ああ、あんたは、あんたが、とうとうあんたがあの人

たちの言葉を、あたしに分らない世界の言葉を話し出した。

……ああ、どうしよう。どうしよう。どうしよう。

与ひょう おい、どうしただ? つう……

つう どうしただ、つうーえ? ……そういったのね? 「どうし

ただ、つう」っていつてくれたのね? 今。

最初から言葉が通じない惣ど・運ずとは異なり、与ひょうとの間

は、お金に関する言葉のみが通じなくなるように描かれている。ここから、与ひようは惣ど・運ずのようにつうを利用し、金を儲けようとする人間になりつつあると受け止めざるをえなくなる。このように惣ど・運ずの言葉の断絶が描かれるだけでなく、物語の中盤で与ひようかつうとの間にも、言葉の断絶が引き起こされることの結果について、白井宏は次のように述べている。

この戯曲の中で「ことばの断絶」は二ヶ所見られる。まず最初はつうと惣ど運ずの間の断絶であり、次はつうと与ひようとの間のそれである。前者は後者のための伏線、準備としてあるわけで、より重要な意味が後者にあることはいうまでもないことである。

白井が述べているように、最初に惣ど・運ず間で言葉の断絶が起こることで、次に起こる与ひようとの言葉の断絶は、与ひようがつうと対立する世界の人になりかけていると読ませるだけでなく、二人の愛が金によって崩壊しつつあると推測させる構造になっている。首藤基澄が「純粹な愛の生活を送ってきた与ひようが、金の計算をする世界に一步踏み込むことによって、愛の世界にのみ生きるつうとの間に、まずことばの上での断絶が生じることになる⁽³⁵⁾」と述べているように、与ひようの言葉を、惣ど・運ずのように、つうが理解できなくなることによって、与ひようが彼らと同じ世界の住人になっていくのではないかということを表現している。与ひようの変化がつうと対立する存在である、金を求める惣ど・運ずと同じで

あると読み取れるため、受け入れることができなものとされるのだ。そのため、つうが一方的に、与ひようを拒絶することも、当然の行為として受容されていたのだ。

また、つうと惣ど・運ずの関係から、「夕鶴」の物語の方向性について、千田洋幸は次のように述べている。

惣ど・運ずは、はじめからつうとコミュニケーション不可能な人物として設定されているが、両者の隔たりの本質は、惣ど・運ずが人間でつうが異類の化身であることや、両者が世俗的な物欲／超日常的な純粹性という対立に裂かれていることにあるわけではない。惣どと運ずを、己れと等価な「存在」として認識しようとしないうちの権力的なつうの意識と、つうにたえず聖性を付与し、超越的な地点に位置づけようとする物語の基本的な方向性が、両者のあいだに埋めることのできない距離が横たわっているかのような虚構を形づくるのである。

千田が述べているように、惣ど・運ずに対するつうの態度は、ひどく排他的である。だが、つうが彼らを拒絶しながらも、最終的には機織りをせざるをえなくなる展開へと、物語が進められることによって、つうは被害者としての側面を高めていく。与ひようの変化をはじめとする、自分が求めていないものは受け入れられないつうの態度は、「つうの愛というものを限定してもいるし、一方的なものにもしている」と渡辺保が述べているように、ひどく独善的であるといえるだろう。言葉の断絶は、つうの自閉感を表徴しているのだ

が、物語内でつうの独白が被害者の言葉として読まれることによつて、つうが拒絶するのは、正当な反応として受け止められ、つうの悲劇性を高める要素として作用することになる。そのため、一方的とも思えるつうの言説でさえも、与ひょうの変化が否定的に捉えられることで、肯定的に捉えられていくのだ。

つうとは意思疎通が不可能な、惣ど・運ずの手によつて、末尾の覗き見及びつうとの別れへと、物語が展開していくため、つうを中心において物語を読んでいったときに、別れはつうや与ひょうが選択したものではなく、第三者の手によつて引き起こされたかのように受け止められる。つうの愛は自閉的であり、排他的であるにも関わらず、このような彼女の被害者の側面が強められているため、つうの言動は肯定され、「夕鶴」をつうの悲劇として読ませるようになっていたのだ。

五、民話からの脱却

今まで原話の男である、与ひょうと惣ど・運ずについて注目し、改変されたことで物語全体の悲劇性が高められてきたことを考察してきた。最後にクライマックスの場面での改変によつて、どのように悲劇性が高められているのかを確認していきたい。

原話である「鶴女房」では、鶴は覗き見されると気が付くと「見るなど云うに、見たさかいに、俺アこれで暇を貰う」と言い、布を織りかけたまま、すぐに飛び去ってしまった。これに対して「夕鶴」は覗き見をされてからつうが飛び去るまでに、前述した原話

から複数の転機が存在している。

まず、別れの原因ともなる覗き見の場面は次のように描かれている。

惣ど ええ放さんか。やい放せ。(のぞく) やつ、ややつ。
運ず ど、どうしただ。
惣ど やい、おい、見てみい。鶴だ。鶴だぞ。鶴が機を織つとる。

運ず な、何？鶴？(のぞく) やつ、つ、鶴だ。女房はおらん
で鶴がおる。自分の羽をくわえて、機の上をあっちゃ行つたりこつちゃ行つたり……ふうん……

(中略)

与ひょう はあ？鶴だ？鶴がおるんかな？この中に……。はあ、見たいのう。いんね、いかんいかん、つうに怒られる。……
それでも、鶴が何しとるだ？ ……はあ、見たいのう……。
見ちやいかんかのう？……のう、つうよ……つう、ちよつと見るだぞ。いんね、いかんいかん、見ちやならんとつうがいうただ。のう、つう……おい、つうよ。……何で返事をせん？ ……おい、つう……つうよ。……はれ、どうしただ？……どうしただ？つう。……おい。……はあ、黙つとる。……見たいのう……見たいのう……おい、ちよつと見るでよ。……(ついに見る) はれ？鶴が一羽おるきりだ。……つうがおらん。……はあ、どうしただ、こら……。おい、つう、つうよ……。はれ、おらん……。どうしたらえ

えだ、こら……。つうがおらん。つうがおらん。おいつう
 ……つうよう……。つうよう……。つうよう……。うろうろと
 探しつつ外へ出て行ってしまおう)

「鶴女房」と「夕鶴」との覗き見の場面の違いを整理してみると、次の二点があげられる。まず、覗き見する男が「夕鶴」では惣ど・運ず・与ひょうの三人になっていること。そして、「鶴女房」の場合、鶴は覗き見されていることに気が付くと、即座に飛び去っているのに対して、「夕鶴」では覗き見されたのにも関わらず、千羽織を二枚織り上げ、与ひょうに渡した後に飛び去るようになっていくこと。

「鶴女房」では、機を織っているところを覗かないという、予め決められていた約束を男が破ったために、鶴は立ち去るという単純な展開になっているが、「夕鶴」では「機を織っていることを決めたのぞいて見ないこと」という約束を破った与ひょうに対して、つうが彼女の愛情の象徴でもある千羽織を織り上げるまで飛び立たないという、つうの与ひょうに対する愛情が強く描かれるようになっていく。「夕鶴」で、つうの飛び去る場面が「鶴女房」と比較したときに、際立って悲哀性を帯びるのは、覗き見の後も千羽織を織り続ける、つうの行動が大きく関与している。

そのようなつうの行動だけでなく、ここでは、与ひょうの行動も末尾の場面を悲劇化していることに注目したい。最初は、覗くことを我慢していた与ひょうであったが、運ずが、去り際に残した「鶴がおる」という言葉に疑問を覚え、つうに呼びかける。引用から分かるように、与ひょうが覗き見したのは、つうが返事をしないこ

とに不安を覚えたことが原因となっている。惣ど・運ずが、与ひょうが覗き見をするきっかけとなっているのに加え、与ひょうが、つうを大切に思っているが故に、つうとの約束を破ってしまう。第三者の手によって、つうとの別れが起こされるだけでなく、その後の覗き見をしても、つうが鶴だと気がつかず、つうを探し求め、外をさまようという与ひょうの行動も物語の悲劇性を高めているのだ。

このように、覗き見の場面では、与ひょうがつうを心配したために約束を破ってしまうという、与ひょうがつうを大切に思っていることが読み取れるが、その後の千羽織を二枚渡す場面では、逆に、二人がすれ違つていく様子が描かれている。次に引用するように、末尾のつうと与ひょうの対話が、対話として成立しなくなっていくことで、物語の最初では相手のことを思い合っていた二人の関係が、すでに破綻してしまっていることが露わになっている。

つう あたしはいつまでもいつまでもあんたといっしょにいた
 かったのよ。……その二枚のうち一枚だけは、あんた、大
 切に取っておいてね。そのつもりで、心を籠めて織つたん
 だから。

与ひょう ふうん、ほんとにこら、立派に織れた。

つう (与ひょうの肩をしっかりとつかんで) ね、大切に取っ
 ておくのよ。大事に大事に持っていてよ。

与ひょう (子どものように) うん、大事に大事に持ってるだ。
 つうのいうことなら、おら、何でも聞く。だけに、なあ、
 つうよ、いっしょに都さ行こう。

つう ううん、あたしは……(笑って、立つ。―すつと白くなる)こんなに痩せてしまったわ。……使えるだけの羽根をみんな使ってしまったの。あとはようよう飛べるだけ……(薄く笑う)

与ひよう (急に何か感じて)おい、つう。(すがりつく。―その手はただ空を抱いている)

(中略)

つう ね、ほんとにあたしを忘れないでね。その布、一枚だけは、いつまでも大事に持っていてね。

与ひよう お、おい、つう……

つう さよなら……さよなら……

与ひよう つう、おい待て、待てちゆうに。おらも行くだ。おい、つう……つう……

つう だめよ、だめよ、あたしはもう人間の姿をしていることができないの。またもとの空へたった一人で帰って行かないよ。……さよなら……元気でね……さよなら……さよなら……本当にさよなら……(消える)

布が二枚あることに気を取られ、つうの異変に最初は気がつかなかった与ひようが、最後の最後でつうの異変にようやく気付く。そして、二枚の千羽織を与ひように渡したつうが、別れを惜しみながらも飛び去って行く。

「夕鶴」の末尾で、つうの飛び去る場面が格段に悲劇性を帯びるのは、つうが別れを迎えることを自覚しながらも、与ひようのため

に自分の身を犠牲にして二枚の千羽織を織り上げるが、そのことに与ひようが最初は気がつかないことが大きく影響している。このように相手のことを思いながらも、お互いの言葉が正しく伝わらないという、二人の対話が描かれることで、つうとの離別という別れの悲しみだけでなく、語る行為のレベルにおいても物語は悲劇化していく。そしてつうが飛び去った後、惣どが千羽織を与ひようから取るうとするものの、与ひようが手放さないことで、最後のつうの「その布、一枚だけは、いつまでも大事に持っていて」という願いだけは叶えられる。このようなつうの健気さが描かれることで、物語はつうの悲劇として終焉を迎える。

惣ど・運ずによって、つうと与ひようの別れが引き起こされたという内容だけでなく、分かりあっていたはずの二人がだんだんとすれ違っていく様子が描かれることによって「夕鶴」は、原話「鶴女房」をはじめとする民話での、鶴と男との離別とは同一視できない、独自の悲劇性を生み出しているのだ。

六、悲劇化する仕組み

これまで「夕鶴」が悲劇として受容される構造を再考してきた。ここで改めて、「夕鶴」の悲劇化する仕組みを整理して述べていきたい。

まず、「夕鶴」の話型であるが、原話としている「鶴女房」は、異類婚姻譚であるため、物語の最後には鶴の化身である嫁と男との別れが予め設定されている。それを原話にしている「夕鶴」でも、つ

うの正体が鶴だと明かされた時から、つうとの別れが暗示されるといふ、物語の基盤が悲劇的であることがあげられる。

次に、物語の内容面について、悲劇化している効果を整理していくと、以下のようにまとめることができる。第一につうと与ひょうの関係性が、物語が進行していく中でだんだんと、千羽織やお金をめぐり、すれちがつていくようになるという物語の主軸である、つうと与ひょうとの関係の破綻が描かれていること。第二に、つうと与ひょうの二人の別れが、第三者であるはずの、惣ど・運ずがきっかけになって起こされ、二人が望んでいないのに、別れなければならぬ展開になっていること。第三に、つうが自分の身を犠牲にして、与ひょうのために二枚の千羽織を渡すことで、つうの献身的な愛が強調されていること。以上三点のように、原話からの改変によって、基本的な物語の悲劇性が高められている。また、単純に読んでいるときは、表面化してこない、与ひょうを思ってしまったはずの、つうの行動が逆説的に働いていることに気がつかないつうの悲劇と、つうを思ってしまったはずの行動が、つうを失ってしまうことになる、与ひょうの悲劇という、それぞれの悲劇が交錯することによって、末尾における二人の離別が、より一層悲劇性を高めて展開していくようになっていく。

そして、戯曲の特徴である対話が機能しなくなる言葉の断絶によって、分かりあっていたはずのつうと与ひょうが、すれ違っていくようになったという、二人の関係が破綻していく様子が表現されている。物語の最期の二人の対話でも、対話が対話として成立しなくなる様子を描くことで、つうと与ひょうとの別れが決定的である

ことを表している。

このように「夕鶴」は、単に物語の悲劇性が原話「鶴女房」から高められているだけではなく、潜在化している物語や戯曲の表現技法を活用することによって、悲劇化する仕組みが重層化している構造を持っていたのだ。

〈注〉

- (1) 「夕鶴」の基になった戯曲であり、一九四六年に一度NHKでラジオ放送されたのみで活字化はされていない。
- (2) 同年の演出賞を岡倉士朗が、装置賞を伊藤嘉朔が受賞している。
- (3) 一九五一年二月に第一回芸能選奨文部大臣賞を、一九五一年二月に大阪市民文化賞名誉賞を、一九七三年二月にとち乃木賞（宇都宮演劇鑑賞会創立一五周年記念）を、一九七五年一月に一九七四年度朝日文化賞を、一九八四年二月に一九八三年度倉敷市民劇場特別賞を、山本安英は受賞している。
- (4) 菅井幸雄「戦後演劇の多様な形成とその展望」〔講座日本の演劇7 現代の演劇I〕勉強社 一九九五年五月
- (5) 団伊玖磨によってオペラ化されたり、アメリカ・中国・エジプト・イタリア・朝鮮・スペイン・ドイツ・ポーランド・スリランカなどの各国で、翻訳されたりしている。
- (6) 井上理恵が「木下順二『夕鶴』を読み直す」〔演劇学』三八巻 一九九六年二月）の中で「『夕鶴』は文学として中学校・高等学校用国語教科書に取り上げられた数少ない戯曲でもある」と述べているように、当時の人々に愛されていた戯曲を同年代の教科書に採択することは、画期的な試みで

- あったと考えられる。また、小学校では、木下順二が教科書用に書きなおした作品が採択されていたので、実質的に戯曲「夕鶴」が採択されたのは、中学校と高等学校のみであった。
- (7) 平成二〇年度版学習指導要領の改訂から、国語科では(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)が設けられたため、今まで以上に古典教育への注目が高まっている。このことから、今後「夕鶴」が教材として採択される可能性は、大いにありうると考えられる。
- (8) 小沢幸代『夕鶴』の児童文学への影響」(『大妻国文』一三三号 一九八二年三月)
- (9) 木下順二「もう一度、あとがき」(『夕鶴・彦市ばなし』新潮文庫 一九五四年五月初版 ※ただし引用は、二〇〇七年七月六〇刷によった。)
- (10) 菅井幸雄『夕鶴』—その想像の歴史—(『夕鶴の世界』第二次綜合版)一九七四年九月第一刷発行)
- (11) 尾崎宏次「夕鶴」の演劇性」(『国文学』二四一三三号 一九七九年三月)
- (12) 鈴木敏子「木下順二作『夕鶴』批判」(『日本文学』一六四号 一九六七年四月)
- (13) 井上理恵(注6参照)
- (14) 稲葉三千男「メデイウムとミッテルと」(『国文学』二四一三三号 一九七九年三月)
- (15) 十河愛子「夕鶴」考」(『早文会論集』五巻 一九八九年二月)
- (16) 平井修成「鶴の孤影—木下順二に於ける、民話と『夕鶴』—」(『昔話伝説研究』七巻 一九七八年一月)
- (17) 石塚倫子「夕鶴」と『オセロー』—侵犯する『周縁』としての女とドラマ—(『比較文学』三六巻 一九九四年三月)
- (18) 千田洋幸「他者のいない言葉 木下順二『夕鶴』論」(『東京学芸大学紀要2部門』五二巻 二〇〇一年二月)
- (19) 西村恵「夕鶴」小論」(『解釈』三一〇号 一九五七年一〇月)
- (20) その他に、松坂俊夫「夕鶴」への一視点」(『古典と近代文学』八巻 一九七〇年一〇月)や、沢田フク「木下順二『夕鶴』についての一考察」(『日本文学研究』一四巻 一九七五年一月)があげられる。
- (21) 「鶴女房」から『夕鶴』へ」(『毎日グラフ』一九八四年八月二六日 ※ただし引用は『木下順二集1』岩波書店 一九八八年四月によった。)
- (22) その他に、首藤基澄「夕鶴」論」(『方位』二〇巻 一九九九年三月)があげられる。
- (23) 注(13)参照
- (24) その他に、宮岸泰治「つうと戦争体験」(『国文学』二四一三三号 一九七九年三月)や千田洋幸「木下順二と『戦後』—『夕鶴』の受容をめぐる—」(『解と鑑賞』八九四巻七〇—一〇号 二〇〇五年一月)があげられる。
- (25) このように舞台の「夕鶴」での評価と同一視されることに対して、「夕鶴」が発表された三年後に開催された、一九五二年の民話の会を中心に催された座談会においても、「戯曲を読んだ時の印象と実際に舞台にかかった時の印象との間にずれがでくるといふ問題」(『民話劇・夕鶴をめぐる』『文学』一九五二年一月号 ※ただし引用は『綜合版夕鶴』未來社 一九五三年五月による。)として、軽くではあるが、話題にも挙がっていた。
- (26) 十河(注(15)参照)は、「つう」を理想の世界、愛の世界とすれば、彼等は現実の世界に住む俗人であり、『与ひょう』はこの二つの世界を揺れうごく弱い人間であろう」と論じている。
- (27) 鳥居明雄「共犯と他者」(『日本文学』三九二号 一九九〇年二月)
- (28) 注(15)参照
- (29) 『木下順二集1』(岩波書店 一九八八年四月 ※ただし引用するにあたり、ルビは削除した。)この後の本文の引用も、全て同様である。
- (30) 鈴木裳三編「鶴女房」(『全国昔話記録』内「佐渡島昔話集」三省堂 一九四二年 ※ただし引用するにあたり、ルビは削除し、旧字体は新字体に改めた。)